

医大ニュース

No.74 2002.7

発行 京都府立医科大学

〒602-8566 京都市上京区河原町通
広小路上ル梶井町465

TEL 075-251-5210 FAX 075-211-7093

医学部看護学科開設記念式典

医学部看護学科の開設を記念して、去る4月8日、ルビノ京都堀川「みやこの間」にて、開設記念式典及び祝賀会が盛大に開催されました。式典・祝賀会には、荒巻前京都府知事、坪内京都府議会議長、西城看護協会会長をはじめ、府関係、実習施設長、看護関係者など126名ものたくさんの方に御出席いただきました。

式典では、荒巻前知事はじめ御来賓の方から温かい御祝辞をいただくとともに、たくさんの方から寄せられた祝電も披露されました。

祝賀会では、常日頃お世話になっている関係者の方々と親交を深めることができ、加嶋前医療技術短期大学部長からは、看護学科教員には大学院の設置も視野に一層研鑽されたい旨の激励の言葉をいただきました。

最後に、種池看護学科長から、感謝の言葉が述べられ、看護学科教員一同一層心を合わせて、看護学科教育をさらに充実する旨表明されました。



荒巻前知事の御祝辞



種池看護学科長のあいさつ



看護学科の関係者

目次

1	医学部看護学科開設記念式典.....	1
2	管理職就任あいさつ	
	・研究部長就任にあたって.....	2
	・看護学科長就任にあたって.....	2
3	教授就任あいさつ	
	・整形外科科学教室.....	3
	・皮膚科学教室.....	3
4	教授定年退職を迎えて	
	・人文科学教室.....	4
	・第三内科学教室.....	4
	・老化研神経内科学部門.....	5

5	学内ニュース	
	・医学部看護学科開設.....	6
	・平成14年度当初予算概要.....	7
	・卒業式・入学式.....	8
6	トピックス	
	・病院玄関ホール等改修完了.....	9
	・下鴨グラウンド整備完了.....	9
	・新人看護師宿泊研修.....	10
	・医科大学附属病院ホームページ開設.....	11
7	特集	
	・新人ナースにひとこと.....	12

管理職就任あいさつ

研究部長に就任して



附属脳・血管系老化研究センター
病態病理学部門教授 伏木 信次

- 大学院重点化を通じて次代の人材育成を一このたび4月1日付けで研究部長を拝命いたしました。一言御挨拶申し上げます。

近年、医学研究は関連諸科学のめざましい発展に伴い大きく変貌しつつあり、研究の進展スピードもますます加速されてまいりました。そのような中、本学では昨年来、

西野前研究部長を中心に大学院重点化への準備が開始され、その申請を目前に控えています。

さて京都府立医科大学は、明治5年に開設された京都療病院に起源をもつ日本屈指の歴史と伝統を有する医科大学ですが、その設立経緯から、京都府における医療の中核を担い得る、優れた人材の育成にこそ本学の使命があると考えられます。これは本学が掲げている『世界トップレベルの医学を京都府民の医療へ』という標語にも表わされています。

ところで、現在準備中の大学院重点化は一体どのような意義と特色をもつのでしょうか。

第一は、大学院重点化は「個性ある研究型大学」へと本学の旗幟を鮮明にすることになります。独立行政法人化など今後予想される大学を取り巻く環境の激変に備えて、これは不可欠なステップと申せましょう。

第二は、本学の個性を伸ばすために、大学院で育成すべき人材として、先端医学研究者と高度先進医療人という二大目標を設定している点に特徴があります。

第三は、リベラルアーツに裏打ちされた豊かな人格を涵養する一方で、先端医学の高い研究技量を磨くことができるよう、統合医科学一専攻の大学院として、上記目標の実現を図っていることです。

つまり、重点化された大学院における真摯な取り組みを通じてこそ、今世紀における本学の使命を達成するための前途有為な人材の育成が図れると考えます。

時代が激しく変化する中であっても、「万里一鉄」という禅の言葉のように、130年の時空を超え一鉄の如く貫いている本学の設立理念を具現するための、まさに人材育成の場として、大学院重点化をとらえ、来春の設置認可に向けて微力を尽くしたく存じます。関係各位の御理解・御支援・御協力をお願い申し上げます。

もとより研究部長として、本学には研究環境整備に関連した課題が山積していることを承知しています。皆様の叡智を賜りつつ、本学における研究の更なる活性化に資するよう鋭意取り組んでまいり所存ですので、何卒よろしくご支援をお願い申し上げます。

医学部看護学科長の就任にあたって



医学部看護学科教授 種池 礼子

「Heart, Hand, Head」の精神に基づいた
バランスのとれた教育

本年、4月1日付けで医学部看護学科長に就任いたしました。

医学部看護学科は、明治22年に医学科の前身である京都府医学校に設置された附属産婆教習所と、明治29年に附設された附属看護教習所に始まる長い歴史と伝統を有しております。また、平成5年には、京都府立医科大学医療技術短期大学部看護学科を

開学し、平成8年には専攻科（保健学専攻・助産学専攻）を開設し、創設以来4,521名の卒業生を送り出しております。

21世紀は、少子高齢化、疾病構造の変化、社会環境の変化、グローバル化の進展などを背景に、高度な専門性と国際性を併えた保健・医療・福祉の専門職者が求められております。看護学科は、このような社会情勢の変化に伴う医学・医療や教育のニーズに対応するため、長い看護教育の歴史を基盤に多くの研鑽を重ね、より一層の充実を図ってまいりたいと思います。

この度、本学が全国に101校ある看護系大学に参入できたことは多くの方々のご協力のおかげと感謝しております。また、京都府で初めての4年制の看護学科の開設に大きな喜びと同時に重い責任を感じております。

近年、看護に対する要望は非常に複雑化・多様化しており、単に技術や知識だけでなく、豊かな人間性を涵養していくことが求められております。本学科においても長い歴史と伝統の中で培われてきた「Heart, Hand, Head」の精神を継承して、豊かな人間性と創造性を育む幅広い教養教育を基盤に、ますます発展していく保健・医療・福祉の分野に対応できる高度な専門知識と技

術を備えた看護のスペシャリストを育成するための専門教育を行っていきたく思っております。

また、看護学科では看護師、保健師、助産師の養成に必要なカリキュラムを包含しているため、卒業時には全員が看護師と保健師の国家試験受験資格が得られるほか、選択により助産師の国家試験受験資格も得られ、学生は幅広い選択肢の中から自分の個性に適した職業を選択することが可能になります。

御所と叢山寺に囲まれた美しいキャンパスで、創意工夫をこらしたカリキュラム、医学科・看護学科の相互協力による包括的で全人的医療を目指した教育を視野に入れながら、学生達が伸び伸びと主体的・創造的に学んでいけるような看護学教育を展開していきたいと思っております。

さらに、近い将来、看護学科に大学院を設置し、研究者ならびに高度な専門職業人の育成を行っていかねばならないと考えております。

皆様方には、今後ともより一層の御指導、御支援を賜りますよう心よりお願い申し上げます。

教授就任あいさつ

安心・納得の整形外科医療をめざして



整形外科教室教授 久保 俊一

平成13年2月1日から整形外科教室を担当させていただいております。私は、昭和53年に本学を卒業、昭和58年に大学院終了後、Harvard大学留学を経て、昭和60年に与謝の海病院に勤務しました。その後、本学の助手、講師および助教授として、一貫して本学で診療、研究、そして教育に携

わって参りました。その間、日仏整形外科学会交換留学生としてフランスSaint Etienne大学にも留学させていただきました。臨床面では股関節外科を担当し、とくに特発性大腿骨頭壊死症では厚生労働省の特定疾患重点研究事業研究班員を昭和63年以後現在まで務め、原因解明や診断基準・病型分類・病期分類の作成に尽くすとともに、高度な技術を要する大腿骨頭回転骨切り術を早期から導入してまいりました。また、高度破壊股関節に対する人工関節置換術も積極的に実施してまいりました。研究面では軟骨代謝、関節疾患に対する遺伝子治療、MRIによる病態解明、人工関節の基礎研究などを行ってまいりました。

折しも2000年からは、世界保健機関(WHO)、世界38カ国の政府、日整会を含む各国の整形外科を中心とした学会、患者団体など多くの団体が参加して『骨と関節の10年』の運動が展開されており、社会からの整形外科への期待は大きく、裏返せばそれだけ社会に対する責任も大きいといえます。元来、整形外科の本質は、病気でない、という消極的な健康観をこえて、いかに元気に

暮らすか、という積極的な健康観にあると考えています。これはまさに、「quality of life」の向上が求められる現在に合致するものです。また、人口構成の高齢化や逼迫した経済情勢から、医療においてもコストがたいへん重要なキーワードになってきています。医療のコストを抑え、かつ生活の質を向上を図るという観点から、疾病や外傷を予防する、また重症化を予防する、という広い意味での予防を念頭において臨床や研究を行っていきたくと考えています。

また、大学の学部教育や卒業後教育では、多様化する患者さんひとりひとりの幸福に対する考え方を理解し、患者さんの立場に立った、『安心・納得』の医療を提供できる技量と心を備えた医師の養成に努めたいと考えています。歴史ある整形外科教室の伝統を大切にしながら、質の高い臨床、研究および教育が行えるよう、全力で貢献してまいります。何卒、御指導と御鞭撻をいただきますようよろしくお願い申し上げます。

皮膚科の現状と未来



皮膚科学教室教授 岸本 三郎

平成14年2月1日付けで皮膚科学教室を担当させていただくこととなりました。私は昭和47年に京都府立医科大学を卒業し、卒業後30年の間一年間のカナダ留学時期を除く29年間母校皮膚科学教室でお世話になってきました。この間、世の変遷とともに皮

膚疾患も様変わりをしました。減少した疾患の代表は結核関連の皮膚病であり、逆に増加したものの代表はメラノーマを代表とする皮膚悪性腫瘍とアトピー性皮膚炎です。従いまして、これからの皮膚科の診療と研究はこれら疾患を対象とすべきであります。

外来診療は4本柱、すなわちアトピー性皮膚炎・湿疹・乾癬・白癬等を対象とした一般皮膚科、皮膚悪性腫瘍・褥瘡・下腿潰瘍・糖尿病性潰瘍等を治療する外科的皮膚科、膠原病・リンパ腫等内科との接点が多い内科的皮膚科および皮膚の光老化・にきび等をレーザーやケミカルピーリングで治療する整容的皮膚科を中心として行います。

また、私はこれまで皮膚癌、特にほくろの癌であるメラノーマの診断と治療および創傷治癒を専門領域として研究・診療を行ってきました。メラノーマにつきましては患者さんのQOLを考慮し、センチネルリンパ節生検にて可能な限り縮小手術を目指しています。しかし、手術・化学療法後の生命予後のみならず必ずしも満足できるものではなく、さらなる治療法が必要でありま

す。そこで、患者さんの樹状細胞を用いたメラノーマワクチン療法の臨床応用を学内の倫理委員会に検討をお願いすると共にその準備を整えております。創傷治癒につきましても糖尿病性潰瘍や下腿潰瘍等の難治性皮膚潰瘍の病態解明と共に創傷治癒に関係するサイトカインや細胞増殖因子の臨床応用やそれらの遺伝子治療を行い、創の早期治癒を目指しております。さらに、ケロイド等醜形を残す異常創傷治癒の阻止も大きな課題と考えています。

最後になりましたが、最も重要な課題は学部学生や大学院生を含む医学・卒業後教育であります。その基本は、患者さんと会話ができる医者であることですから、まず挨拶をすること、ついで患者さんの気持ちを押し量れる心を持った皮膚科医を育てていこうと考えております。皆様方の御指導、御鞭撻を何卒よろしくお願い申し上げます。

教授停年退職を迎えて

刺激に満ちた18年だった



前人文科学教室教授 湯浅 慎一

1985年に京都府立医科大学にやって来た頃はまだ冷戦真只中で、それが一部の学生のかもしだす雰囲気や行動に現れ、花園はときどき緊張に包まれた。カリキュラム上の学生の要求は受講すべき科目を減らしてゆとりを与えよというものだったが、これは現文部科学省のカリキュラム観と極似し

ていることは興味深いことだ。「基本的学習までもゆとりを」の名のもとで日々手が抜かれることがあるのは残念である。イデオロギーの世紀は過ぎ去り、環境の世紀に入っているが、医学教育の世界ではほとんどそのように意識されていない。医学生も啓発されるべきときが来ていると思う。私は生命倫理と並んで環境論の授業をしてみたが学生の反応はあまり良くはなかった。患者の自律性と人権を自覚する医療者への、そして環境を自覚する理性的な市民への教育へと医学教育も変化していかなければならないだろう。自分が病気になり多くの患者のなかのひとりとして医師を見てみると、患者は健康者よりずっと消極的に、そして受動的になるのがわかる。そこには通常の話、対等な関係が欠けている。このような状況に慣れると、医師は大抵の場合パタナリスチックな性格を獲得してしまうだろう。このようにならないように学生時代に学習されるべきだろう。教養教育部の時間や研究費のゆとりは哲学研究の他に秘密結社フリメイソニーの研究(湯浅慎一著『フリメイソニー』中公新書)を可能にした。

この研究は歴史の裏面を教えるのみならず、個人主義の欧米社会には意外にも親密な人間関係があることをも教えてくれた。研究とはそもそも人間や自然の隠れいざされている意外な側面を見せてくれるものである。私は花園でこのような研究生活を送れたことを有り難く思っている。パブル期に医学振興会より数回海外出張する機会をいただき、幾つもの欧文論文を発表できたので、それらを基にしてドイツ語の書物をドイツから出版することができた。それが海外の大学のゼミなどで使用されているのを知って日本語の限界を感じる。これからの研究者は英語だけでもよく出来るようになってその研究が大いに海外に認められるようになればと願っている。このように過去18年の府立医大での生活は非常に多様で、刺激に満ちていた。あと数年は女子大学でまた新しい教育活動に励もうと思う。最後ながら今後の京都府立医科大学の更なる発展を祈念します。

停年退職を迎えて - 御礼の挨拶 -



前第三内科学教室教授 加嶋 敬

この度、平成14年3月31日を以て、長年お世話になりました京都府立医科大学の停年退職を無事迎えることが出来ました。取り敢えず元気で任期を全う出来ましたことを先ず神に感謝しております。そして何とか大事なく教室運営を全う出来ましたことは、第三内科学教室並びに同門会、本学および諸学会の皆様のお指導・御鞭撻のお蔭と唯々心から感謝申し上げます。

私は昭和39年本学を卒業、インターン終了後の昭和40年、当時の増田正典教授の主宰する第三内科学教室に入局してから今日までの37年間お世話になりました。この間、国立福知山病院副院長、ニューヨーク医科大学留学の間を除く32年5ヶ月第三内科学教室に務めました。

この間、教室の移り変りをつぶさに経験して来ました。中でも昭和54年3~4月には、医局長として増田正典教授停年退職記念事業、教室開講60周年記念行事挙行、瀧野辰郎教授就任記念行事に携わったこと、その後増田正典名誉教授の逝去、助教授に就任して間もなく瀧野辰郎教授の急逝で教室が混乱したことなど教室の幸不幸を目の当たりにしたのがつい先日のように脳裏に焼きついています。教授会忘年会には多くの名誉教授が参加されるのですが、私の場合は教授就任時、先々代、先代ともすでにおられなく寂しい思いをしました。

教授就任後は、各研究室のヘッドをはじめとする教室員の皆さんが従来以上に研究業績を挙げ、さらに診療・教育によく協力してくれたこと、関連病院勤務の教室員の皆さんが一致協力してくれたことなど、総てのお力添えのお蔭で日本消化器内視鏡学

会総会、日本痔瘻学会大会をはじめとする諸学会の会長あるいは役員に推挙されたこと、さらには平成11年11月には、教授として第三内科学教室開講80周年記念事業が盛大に挙行出来たことなど誠に幸甚な教授任期を全う出来たものと、同門会並びに教室員の皆さんに心から感謝申し上げます。

教授としては幸せでしたが、私事に渡りますと、教授就任数年後に医学部在学中の長男に病で先立たれ、私にとってはこれ以上の不幸に見舞われました。何かの天罰が当たったのではとも思う事があります。今でも悲しさ以上に残念で悔しくてなりません。最近、今後何が起ころうともこれ以上の不幸はないと残された人生に開き直っている心境です。

最後に、大学、病院とも現在大きな岐路に立たされており、諸種の改革が進んでいるところです。管理職、教授をはじめとする大学構成員の叡智を期待し、本学の益々の発展を期してやみません。

無事に停年を迎えられたこと、長年大変お世話になりましたことに重ねて厚く御礼申し上げます。有り難うございました。

21世紀に羽ばたく神経内科学



前附属脳・血管系老化研究センター
神経内科学部門教授 中島 健二

京都府立医科大学に神経内科ができるらしい、という噂を聞いたのは、確か私が東京通信病院に勤務していた時であるから、1970年代の前半であろうか。当時、私は脳神経外科医であった。東京から秋田県立脳血管研究センターに移っても、私はまだ脳神経外科医をしていたが、大学には神経内科ができなかった。その必要性を大学は感じないのかと訝いつつ、大学が作らないのならこっちでと、秋田県立脳血管研究センターに神経内科を開設した。言い出しっぺのお前が管理しろ、といわれて、脳神経外科医のまま神経内科科長を兼務し、神経内

科の勉強を始めた。

何の弾みか、同センターの病院長に就任したので、手術室に出入りはできなくなり、そのまま神経内科を続けるはめになった。そうして何年か経った頃、京都府立医科大学に神経内科教室ができるという通知が来た。できるらしい、といわれて20年近く経っている。さすがに京都は、時間がゆっくりと動く。そうしたら、今度は何の縁か、私に教室を主宰しろとのお達しである。迷った末に、帰ってきた。1990年11月、京都を離れて19年振りであった。

翌年の4月まで、一人で教室の枠組み作りをした。高村光太郎の詩ではないが、ぼくの前には道はなかった。全てが初めてであった。幸い、三つの内科教室教授の御理解を得、各教室の神経内科グループからスタッフを集めることができた。三教授の懐の深さに感謝している。

そのスタッフらと共に診療態勢を整え、研修医を教育し、医学生を教育した。これらは、待たなしの仕事であり、停滞は許されない。数少ないスタッフには多大の犠牲を強いたと、申し訳なく思い、また感謝に堪えない。11年経ち、教室も充実してきた。関連病院から、専門医の派遣要請が引きもきらないが、それに応じられない現状である。

私は京都府が何故、附属病院に神経内科(老年内科)を設置したのかを常に考えて

きた。増え続ける高齢者、それに伴う神経内科疾患、それを適切に診て欲しいという切なる願いがあったからであろう、と思っている。京都府立医科大学はそれに応える義務がある。私は教室員にそのことを常に話しながら一緒に頑張ってきた。だが、まだ教室の基盤は脆弱である。何しろ、創立11年である。教室員は少ないのに、診療、教育などの義務的な仕事は年を追って増えているからである。もう一つ、大学人であれば当然しなければならない研究があるそかになることを、私は一番恐れている。それにはまず、優秀な人材が数多く教室にきてくれることを望んでいる。

本学附属病院も、内科、外科ともディビジョン化が完了した。仏作って魂入れずであってはならない。内科に関して言うならば、内科研修医には、全ての内科的疾患を学ぶようにしてやらなければならない。私は神経内科が内科の一部であるとする考えを推進してきた。内科研修医が短い期間であっても、神経学をきっちりと学べるようにしなければ、他学との間に差がつくであろうし、だいいち、患者の要望に応えることはできない。神経内科はこれからも努力を続けなければならないのは当然であるが、大学当局にも理解と御支援を切にお願いし、退任の挨拶としたい。

学内ニュース

医学部看護学科を開設

本年4月1日に医学部看護学科が開設され、4月4日には新入学生75名を迎えることができました。

現在、医学・医療を取り巻く環境は大変厳しくかつ変化が早くなっています。ポストゲノム研究やES細胞の研究が進むなか、医学は益々発展すると考えられますが、一方、食生活の変化や環境汚染による疾病構造の変化、高齢化が進むなかで看護の形態も大きく変わってきています。

そうした中で、高度で実践的な看護技術とともに、患者さんの心の悩みを癒すことのできる優しさ、患者さんやその家族と良好な関係を築けるコミュニケーション能力、そして自らを厳しく律することのできるセルフコントロールマインドなどを併せ持った、プロフェッショナルな看護従事者を育成することが重要となっています。

このような社会的要請に応えるため、本学としても4年制の看護学科の設立が不可欠と考え、平成11年3月から開設準備に着手し、本年4月1日に府内ではじめての4年制看護学科として開設することができました。

医学部看護学科の特色は、高齢社会の進展に伴い、高齢者に対する心身両面にわたるケアが大きな課題となっているとともに、現代社会の複雑化・多様化に伴い増加するストレスへの対応も重要になってきているという状況を踏まえ、リハビリテーション看護学や精神看護学の分野を、より多くカリキュラムに組み込みました。

また、看護師、保健師、助産師養成の全てのカリキュラムを開講し、卒業生全員に看護師と保健師の国家試験受験資格が得られるほか、選択によって助産師の国家試験受験資格も得られることといたしました。これにより、卒業生は幅広い選択肢の中から自分の個性に適した職業を選択することが可能となりました。

そして、日本有数の医学部の一学科として設置したことにより、看護学分野と医学分野との連携が強まり、看護学の教育・研究をより高度で総合的に推進することが可能となるとともに、医療・保健に従事する医師、看護師、保健師及び助産師が互いに協力し、よきチームワークが形成されることと思います。

今後とも、医学部看護学科が、最先端の看護の教育や研究を行う、京都府における看護学の中核機関として飛躍し、府民の大きな期待と信頼に応えることが期待されています。

医学部看護学科の概要

開設時期	平成14年4月1日
名称	医学部看護学科
定員	入学定員 75名 編入学定員 15名(第3学年で募集) 収容定員 330名
修業年限	4年
学位	学士(看護学)の学位を授与
取得資格	看護師・保健師・及び助産師(選択)の 国家試験受験資格

医学部看護学科の沿革

- 1872(明治5年) 栗田口青蓮院内に仮療病院を設け、患者の治療を行うかたわら医学生を教育
- 1880(明治13年) 現在地の上京区河原町通広小路の梶井町に療病院を移転
- 1889(明治22年) 京都府医学校に附属産婆教習所を設置
- 1896(明治29年) 京都府医学校に新たに看護婦教習所を附設
- 1976(昭和51年) 専修学校制度により、京都府立医科大学附属看護専門学校(看護学科)と改称
- 1983(昭和58年) 京都府立医科大学附属看護専門学校に助産学科を設置
- 1993(平成5年) 京都府立医科大学医療技術短期大学部を開学
- 1996(平成8年) 京都府立医科大学医療技術短期大学部専攻科(保健学専攻、助産学専攻)を開設
- 2002(平成14年) 京都府立医科大学医学部看護学科を開設



看護学学舎全景



実習風景



クラブ活動の様子

学内ニュース

平成14年度 医科大学当初予算の概要

平成14年度当初予算が府議会2月定例会で可決成立しました。

長引く不況により府税収入が落ち込み、府の財政は引き続き厳しい状況にあり、一般会計においては、予算額が財政再建団体であった昭和32年度以来45年ぶりに前年度を下回るなど危機的な状況にあります。本学では、こうした厳しい財政状況の下府全体では170余りの事業が廃止・削減されるな

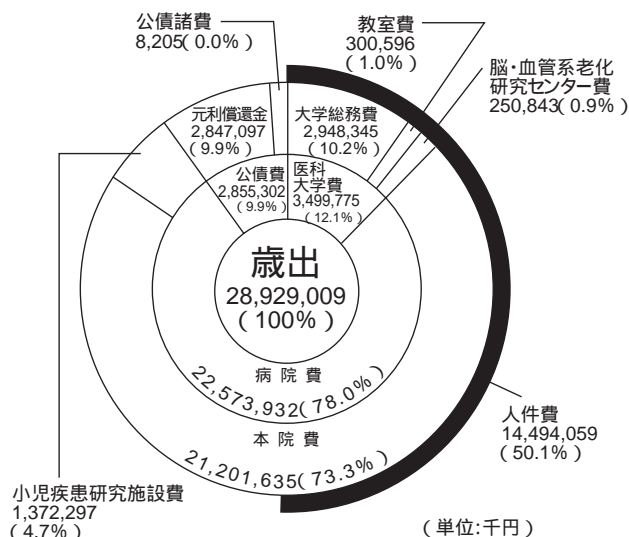
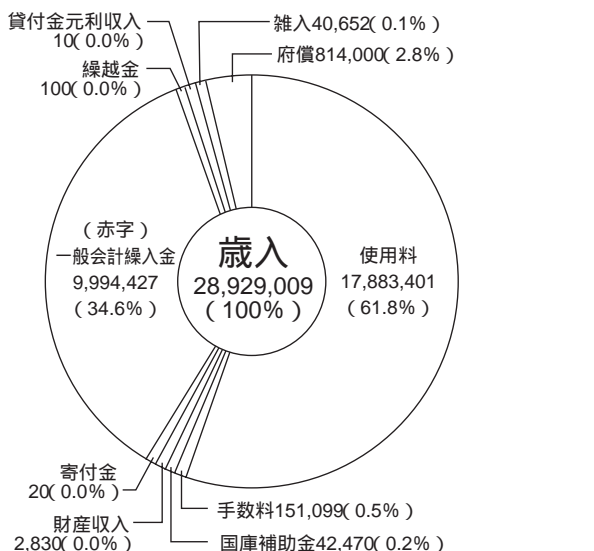
ど歳出予算が厳しく抑制される中、医療を通じた府民福祉の向上に寄与すべく予算の確保に努めましたところ、新たに外来診療棟等の整備構想費や附属病院廃棄物処理システム整備費が認められるとともに、引き続き大型診療機器（X線コンピューター断層撮影装置等）の整備なども認められました。

しかしながら、本学の運営経費は依然として約100億円にも上る一般会計からの繰

入金（赤字）に支えられており、引き続き大学・附属病院の経営改善の推進が強く求められています。

今後とも、附属病院の経営改善を進めるとともに、教職員一人ひとりが日常の業務点検を徹底することにより、一層効率的な運営を心がけながら、府民の健康を守る地域医療の中核施設として、府民の期待と信頼に応えていかなければなりません。

平成14年度京都府立医科大学および附属病院特別会計当初予算の状況



主な事業内容

教育・研究の充実

- ・看護学科教育研究備品整備費 700万円
保健医療環境の変化に対応できる質の高い看護職員の育成に資するため、医学部看護学科の教育・研究備品を整備します。
- ・学外臨床実習経費 200万円
臨床実習教育の充実を目的として、大学外の医療機関において学生の臨床実習を行い、地域の中で役立つ医療人を養成します。
- ・高度情報化推進事業費 411万円
学内ネットワークの保守・管理運営に要する経費を確保し、ネットワークの円滑な運用を図ります。

開かれた大学づくり

- ・公開講座開催費 90万円
本学の医学的研究を府民に還元するため、公開講座を実施します。
- ・国際交流事業費 65万円
エディンバラ市クィーンマーガレット大学に教員を派遣し学術交流を進めます。

患者サービスの向上

- ・附属病院外来診療棟等整備構想費 500万円
高度で適切な医療を提供するとともに、病院経営の効率化を進めるため、外来診療棟の建替等、臨床医学部門の総合的整備に向けた検討を進めます。
- ・附属病院廃棄物処理システム整備費 3億円
附属病院の現行焼却炉を廃止し、医療廃棄物の安全化と廃棄物全般の分別・リサイクルの促進、排出量の削減を行う廃棄物処理システムを導入します。
- ・診療機器整備費 2億9,800万円
地域医療機関として必要な機器を整備することにより、受診しやすい診療体制の整備を促進し、受診患者の増加を図ります。
(2億9,800万円)
- ・大型診療機器整備費 (X線コンピューター断層撮影装置、超音波診断装置)
特定機能病院にふさわしい高度医療の提供を確保するため、老朽化した大型診療機器を計画的に更新します。新機種への更新により検査制度が向上するなど、患者サービス、診療内容の改善につながります。
(血管撮影造影装置等)

学内ニュース

卒業式・入学式

医科大学の平成13年度卒業式が3月1日に挙行されました。

医学科卒業生が109名、大学院修了生が15名でした。

医学科卒業生中、学業成績が最も優秀であった学生に贈られる「京都府立医科大学学長賞」には、栗原ゆかさんがその栄誉を称えられました。

在校生代表の第5学年、竹野内志保さんの心温まる送辞を受けた後、卒業生を代表して栗原ゆかさんが、在学中の思い出や卒業を迎えた喜びと感謝の気持ちを答辞で読み上げました。

医療技術短期大学部の卒業式は、3月8日に挙行されました。

看護学科卒業生が98名、専攻科卒業生が63名（保健学専攻48名、助産学専攻15名）でした。

平成14年度の医科大学入学式は、本年4月より医学部に看護学科が設置されたことに伴い、医学科・看護学科合同で4月4日に挙行されました。入学生は、医学科100名、看護学科75名で、医師や看護師等を目指して勉学と研究に励むことになりました。

在学生代表の医学科第6学年井上健君から、「自分で考える力を持って欲しい」と、大学生活におけるアドバイスを日々の生活の中で例をあげ、情熱のこもった歓迎の挨拶がありました。

翌日の4月5日には、大学院の入学式が挙行され、入学生は75名でした。

また、医療技術短期大学部（専攻科）の入学式が4月4日に挙行されました。入学生は64名（保健学専攻49名、助産学専攻15名）で、保健師、助産師を目指して勉学に励むことになりました。



平成13年度 京都府立医科大学卒業式(卒業証書授与)H.14.3.1



平成13年度 京都府立医科大学医療技術短期大学部卒業式
(卒業生紹介)H.14.3.8



平成14年度 京都府立医科大学入学式(新入生紹介)H.14.4.4

トピックス

病院玄関ホール等改修完了

昨年10月から段階的に行われていた病院玄関ホール等の改修工事が、去る3月に完了しました。

主な改修内容は、会計窓口・医療相談窓口及び薬局窓口のオープンカウンター化、玄関待合いホールの拡充、天井・壁の塗り替え、床の貼り替え等であり、病院玄関全体が広く明るくなりました。

更に会計窓口のオープンカウンター化に合わせて窓口の混雑緩和を図るため、会計順番表示機を設置しました。特に、待合いホールの座席が87席から200席に増えたことや請求書の渡し方がマイク呼び出しから会計順番表示機に受付番号を表示する方法に変わったことについて、オーダーリングにより会計待ち時間が短くなっていることも相俟って、患者の方々の評判も良く、「病院の雰囲気明るく良くなった。」「今までは名前を呼ばれるまで立って待っていたが、椅子もあり番号で表示されるので安心。」との話を頂いております。



下鴨グラウンド整備完了

左京区下鴨の府立大学元農場跡地に整備を行っていた下鴨グラウンドが平成14年3月に完成しました。

この下鴨グラウンドは、医学部看護学科の平成14年4月の設置にあわせて平成13年10月から整備を行っていたもので、学部学生をはじめ自治会体育部も完成を待ち望んでいたものです。

下鴨グラウンドの概要は、南北約100m、東西約70mの約7,000㎡で、花園グラウンドの約3倍に相当し、本学では最大のグラウンドとなります。また、管理棟には男女別更衣室、男女別シャワー室、男女別便所と用具庫を備えています。

下鴨グラウンドの使用については、当面はサッカー部、準硬式野球部、ラグビー部がクラブ活動に使用することとして、既に4月中旬から練習を開始しています。

この下鴨グラウンドの使用を通じて、府立医科大学と府立大学とのクラブ活動交流が活発となり、学生間交流の高まる中で両大学の連携がさらに発展していくことが期待されます。



下鴨グラウンド全景



学生のクラブ活動の様子

トピックス

新人看護師宿泊研修

4月1日から4月11日まで、平成14年度新規採用看護職員研修が行われました。

新たに採用された看護師がスムーズにスタートを切ることができるよう、研修内容は看護部の基本方針から始まり、当附属病院において看護業務に携わる上で不可欠な

事柄を、それぞれの部門の長が講師となり研修は進められました。

その中から、新人職員相互の人間関係を深める機会として、また、社会人としてのチームワークづくりと心構え、職場への適応力を身につける等を目的に、9日、10日

の二日間、京北町（府立ゼミナールハウス）において行われた宿泊研修（学外研修）にスポットを当て、橋本 渉さんと苗村光穂さんのお二人から感想をいただきましたので紹介します。



研修会場風景



研修の様子

一泊研修を終えて

中央手術部 橋本 渉

新人研修の終わりに行われた一泊研修は、それまでの院内で行われていた講義形式の研修とは違い、京北町の自然の中で同期の仲がさらに深まった研修だったと思います。それまでの講義形式の研修ではどうしても聞くことが主で、大学からの知り合いが一人もいなかった私はまわりの人たちと挨拶をする程度で、話しやすい同期の男性とばかり話をしていました。だから、自分のことをまわりの人たちに分かってもらおうとしなかったし、私もみんながどういう人たちなのかそれまでいっしょに研修を受けているというだけでほとんど分かりませんでした。一泊研修はグループワークがほとんどで、その

グループの中で課題について話し合い発表するというものや、グループで協力して課題を達成するというものでした。それぞれが自分の意見を出し、その意見をグループでまとめていくという作業を通して周りの人たちのことを知るとともに、グループとの自分自身の関わり方についても知ることができる機会でした。ゲーム感覚で行なえる研修の中には、これから様々な人たちとチームで提供する医療・看護に必要な要素が含まれており、その過程を自分たちで振り返ることによりこれからも活かせるもの、足りなかった部分が見えてきました。

また、制服姿ではない師長さんたちと

話しができるという数少ない機会だったと思います。制服だとなぜか緊張してしまう師長さんとも普段着なら話やすく、病棟に出る前の不安な気持ちを聞いてもらい励まして頂きました。それに、病棟では見ることで見えない一面を見ることができたように思います。

今は研修も終わりそれぞれの病棟に配属となり同期全員が集まることはなくなりましたが、この一泊研修で得たものを看護に活かし、これからもお互いに励まし合い頑張っていきたいと思っています。

宿泊研修に参加して

C 8号病棟 苗村 光穂

今年の4月、晴れて私は医科大学附属病院に就職することとなった。学生の頃お世話になったこの病院に、今度は看護師としてお世話になる。そのことに対し、私は何とも言えぬ喜びを感じ、大きな期待と不安を胸に、初出勤の朝を迎えたのだった。

次の日から、私たちは新人研修に参加することとなった。研修期間中には、看護師としての知識は勿論のこと、社会人としてのマナー・市民としての義務など、これまでは全くと言っていいほど知りもしなかった多くのことを教えていただいた。そして、研修の総まとめとして参加した宿泊研修では、それまでの研修とはまた

違った、大切なことを教わったように思う。

宿泊研修では、グループワークが基本となっていた。幾人かの人間でグループを作り、そのグループで様々な問題に取り組んだ。グループの友と問題に挑む中で、私は幾人かの人間が寄り添えば、それだけ色々な意見が生まれるということ、そして他の意見と自分の意見を上手く調和させることで、また新たな意見が生まれるということを知った。また、自分の意見を持ちつつ、他の意見にも耳を傾け、視野を広げていくことの大切さを学んだ。

あれから約一ヶ月が経ち、私は実際に臨床の場で働く身となった。日々業務に追われる中、ふと気づくと、そこには必

ずとっていいほどに、グループワークが存在しているように思う。例えば、毎朝のカンファレンスがその一つである。カンファレンスで他のスタッフの意見を取り入れ、患者の抱える問題点・今後の方向性を見直していくことは、より良い看護を行っていく上で重要であると思う。一年目の私の意見は、カンファレンスにおいて有効な意見とはならないかもしれない。しかし、少なくとも私にとって、この毎朝のカンファレンスは、とても貴重な勉強の場であると思う。だから私は、これからも積極的にカンファレンスに参加していきたい。そして、自分の視野をできる限り広げていきたいと思うのである。

トピックス

附属病院ホームページ開設



本格的なIT時代の到来とともに、その更新が待ち望まれてきた附属病院のホームページが、5月15日（水）にリニューアルオープンしました。

このホームページは、

- (1) 京都府立医科大学附属病院への府民の理解の促進
- (2) 患者増や関連病院との連携等による附属病院経営改善の一層の推進

を目的として立ち上げられ、大学ホームページ（<http://www.kpu-m.ac.jp>）や京都府ホームページ（「おこしやす京都」の「健康・福祉」欄）からもアクセスを可能とし、できるだけ多くの方に御覧いただけるよう工夫しています。

なお、ホームページの長所は、常に更新が可能であることです。

ホームページを御覧になり、お気づきのことがあれば、ご意見・ご提案くださるようお願いいたします。

<主な特徴>

- (1) 新規の外来及び入院患者の利便に供するため、外来受診や入院退院の受付及び病院への交通案内等を掲載
- (2) 受診しやすいように、各診療科の特色やスタッフ、専門外来、病院で開催している各種教室等の概要を紹介
- (3) 医療機関向けのページを設け、外来担当医師一覧表と患者を紹介いただく場合の紹介状様式等を掲載

<アドレス> <http://www2.kpu-m.ac.jp/hospital>

概要

項目	内 容
病 院 概 要	病床数等概要、沿革、組織図、診療実績等
診 療 案 内	外来受診案内、入院案内、自動再来受付機使用方法等
各 診 療 科 案 内	診療内容、スタッフ紹介、専門外来・各種教室案内等
病 院 案 内	建物案内、駐車場案内、交通案内
医療機関の方へ	紹介状様式、外来担当医師出番表一覧
お 知 ら せ	健康情報、新着情報、職員等の募集等の案内

特集

新人ナースにひとこと

「いつも笑顔をわすれずに」



C7病棟師長 系井 和代

御就職おめでとうございます。社会人としての生活いかがですか。

今は緊張と期待と不安がいっぱいな毎日でしょう。人と接する看護の道を選んだからには、何年たってもこの気持ちは続いています。

先輩看護師達も早く貴女達が一人前になってほしくて、自分たちの持てる力を大いに発揮して時には厳しく、又、やさしく接して指導しています。

今まで学んだ知識、技術を生かして仕事に取り組み、常に振り返り、あせらず、確実に自分のものにしてほしいと思います。

いつもやさしく笑顔で接し、チームワークを大切にする事も良い看護につながります。又、広い視野を持ち色々な分野の事に挑戦し、自分を磨き、仕事に役立てて下さい。

一年後の成長を楽しみにしています。

「みんなちがって、みんないい」



周産期診療部 濱口 千鶴子

私と小鳥とすずと

金子みすゞ

わたしが両手をひろげても、お空はちっともとべないが、飛べる小鳥はわたしのよう、地べたをはやく走れない。わたしがからだをゆずっても、きれいな音はでないけど、あの鳴るすずはわたしのよう、たくさんうたはしらないよ。

すずと、小鳥と、それからわたし、みんなちがって、みんないい。

私はこの詩が大好きです。新人さんも、プリセプターさんも、ベテランさんもそれぞれ良い所、悪い所、たくさん見つけ合ってお互いに育ち合っていきましょう。皆違うから良い看護が模索されます。素敵な看護師になってください。ただ社会人のルールは守って下さい。礼儀正しく新人さんらしくさわやかに！ご健闘を祈ります。

「1年目は、スリル・ショック・サスペンス？」



ICU 中村 尚美

ご就職おめでとうございます。大きな希望とエネルギーに満ちた方々を職場に迎え、院内はどこも活気に満ちているようです。

患者さん達もフレッシュで明るく優しい新人さんに皆、好感をもたれている反面、多少の不安、恐怖(スリル?)を抱いておられます。また、新人さんも実際の臨床にリアリティ・ショックを感じておられることでしょう。そして現場で出会う「何でやるう?」という気持ちはまさにサスペンス.....。

この「何で?」が実はとても大切で、とりあえず3歳児のように連発してみてください。1年目だけの特権で皆優しく教えてくれます。2年目以降は「自分で考えなさい。」と言われるのでこの1年でどれだけ吸収できるかが今後のカギとなってくるでしょう。そして1年で身についた探求グセは科学的な思考に基づいた看護の展開にきっと役立つはずです。

さあ、ともにがんばりましょう!患者さんのスリルをなくすためにも.....。

